※1
幼小通信「３分くらいで読める遊びの話」　2026年10月30日(金)　山形県教育委員会　vol.0030

3分くらいで読める遊びの話

子供と共に発揮したい身体性

環境との多様な関わり方とは？



ダンゴムシに夢中の４歳児。ダンゴムシ研究所のバッジをつくるために、S児は「ダンゴムシ」の絵を描いた（上画像）。子供らしい素朴な絵の中に、ダンゴムシとの触れ合いの深まりを感じる。

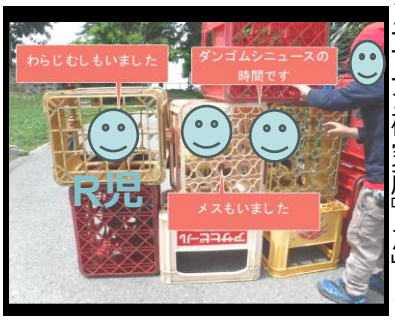
４歳児の春、子供たちはダンゴムシに夢中です。虫かごの中をじっと見ていたS児のところに５歳児のお兄さんが近づいてきました。「ダンゴムシさんにはお水が大切だよ、だってカニさんの仲間だから」

そばで聞いていた担任も、５歳児のさすがの知識に驚きました。急いで水場に向かったS児。虫かごの蓋を開け、水道の先端をかごに近づけました。水を直接注ぎ入れようというのです。S児が蛇口に手を掛けた瞬間「あっ」。子供に任せようと思っていた担任でしたが、咄嗟に声が出てしまいました。

「ダンゴムシさんの絵本、一緒に見てみる？」

制止したことは果たしてよかったのか？しかし、今は振り返っている隙はありません。担任は、S児たちと一緒に「お水が大切」の意味を絵本で確かめました。

数日後「ぼくたちは『ダンゴムシ研究所』だ」と、



友達と集うS児たちの姿がありました。ダンゴムシになりきって部屋中を這いまわっていたかと思えば、園庭に飛び出し、ビールケースを組立て、それをテレビに見立てて「ダンゴムシ発見ニュース」を先生や他の友達に放映するなど、ますますダンゴムシに夢中のS児たちです。担任は「友達と一緒に遊びを進める面白さをもっと味わってほしい」と願い、お揃いの『研究所バッジ』の製作を提案します。それに喜んだS児は、早速バッジの絵を描きました。

「先生、これ固くして」

描き終えたS児。ラミネートで丈夫にして、と言いたいようです。よく知っているな、と担任は感心しながらS児の絵に目をやりました。おや？ダンゴムシの足のうち**妙に飛び出ている一本**があります。

「これは何だろう？」担任はS児に尋ねました。

「先生、知らないの？」

「ほら、おひげ」

とS児。おそらく触覚のことでした。「触覚っていうんだよ」と言いかけて、担任は、咄嗟に口をふさぎました。

「本当だ、おひげだ！」

担任は、S児と一緒に驚き、目を見開き、笑いました。



保育者のここがすごい ～身体性の発揮～

３歳児の頃は、見る虫すべてを「ハチだ！刺す！」と言って逃げ回っていたR児の姿もそこにありました。

五感を通して関わりながら、ダンゴムシは落ち葉の下でよく見つかることや砂場にはなぜかいないこと、オスとメスの見分け方があることやワラジムシと仲良しなこと、足みたいな髭があることや適度な水が必要なことなど、知識を体得していく面白さを子供たちは経験しています。知識そのものの正しさや妥当性を得ること以上に、様々な事象を体全体で受け止める楽しさや、繰り返し関わる中で自分なりに分かる面白さ、分かったことを全身で表現する気持ちよさや、それらを他者と共有する嬉しさなど、子供たちは今、**環境との多様な関わり方**を経験しているのです。

身体いっぱいに対象と関わる**子供のことを**、保育者はどのように**理解**していくのでしょうか。本事例の保育者は**自らも身体性を発揮**しながら、その子理解を深めています。共に笑い、驚き、走り、肌で感じる姿です。時に仮説を立て、共に試し、葛藤し、面白がる姿です。大人側の**身体的関わり**が、子供の好奇心や探究心の広がりを支えています。